川崎賢子（清華大学日本研究センター客員研究員）

連載 1『カリガリ博士』：百年の衝撃

『キネマ旬報』は、映画がようやく芸術の仲間入りをはたし批評を求め始めたころ、1919 年に産声を上げた。その年、第一次世界大戦後のドイツで製作された一本の映画『カリガリ博士』（原題：Das Cabinet des Doktor Caligari ロベルト・ヴィーネ監督）のフィルムはやがて海を渡り、1921 年国際港横浜で『眠り男』のタイトルで封切られ、浅草の映画館に転じたときには『カリガリ博士』と名乗っていた。それからほぼ 100 年が経つ。だから現在はカリガリ新世紀である。

谷崎潤一郎、佐藤春夫、竹久夢二、芥川龍之介、江戸川乱歩、稲垣足穂、内田百閒、夢野久作、小山内薫、秋田雨雀から尾崎翠まで、多彩な書き手が、『カリガリ博士』を見、そして何事か書き記している。

祭りの日に、どこからともなく見世物師があらわれる。その名はカリガリ、演し物は眠り男。棺にも似たキャビネットの中で死んだように眠り続けた男チェザーレは、カリガリの合図によって目覚め、観客の運命を予言する。そして街の人々はおりからの連続殺人事件の恐怖におののくことになる。

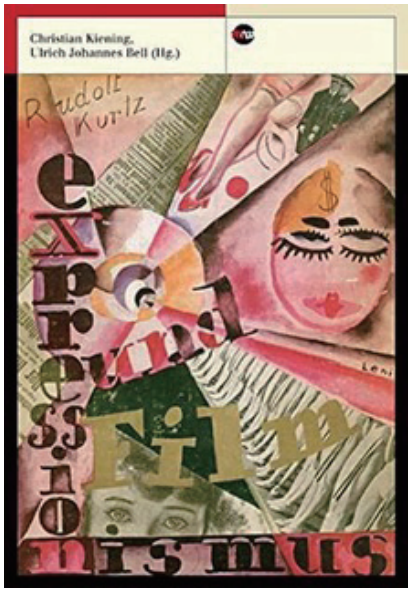
『カリガリ博士』の美術に衝撃を受けた竹久夢二は、記憶のままにデッサンを残している（『中央文学』1921 年 7 月号、『新小説』1921 年 7 月号）。谷崎潤一郎は「悪く云えば所謂表現派の絵画を展開した一幅の絵巻物に過ぎないとも云える」と留保をつけつつ、この種の物語ほど映画に適したものはない、これについて映画以上に効果のある表現の形式はあるまいと認めざるを得なかった（「「カリガリ博士」を見る」『時事新報』1921 年 5 月号、『活動雑誌』同年 8 月号）。いっぽう演劇人・小山内薫は、『カリガリ博士』を通じて受容された表現主義は、「怪奇な芸術」「病的な芸術」「新奇を誇る芸術」「一種のデカダンス」・・と「あやまり伝えられた」（「表現主義戯曲の研究」『演劇新潮』1925 年 6 月号）と嘆いた。これは、同じく表現主義を名乗っていても、叫喚に満たされた舞台と、モノクロ、サイレント（活動弁士付き）の映画とのメディアの相違からしてやむを得ないところだったかもしれない。

ドイツ表現主義の背後には第一次世界大戦と革命の流血があり、台頭するナチスがその前に立ちはだかっていた。百年前のスペイン風邪のパンデミックは、日本をも恐怖の渦に巻き込んでいた。『カリガリ博士』の狂気、不安、恐怖に、日本の文学者たちも共振したのである。

『キネマ旬報』は 1927 年 2 月 1 日号から 1928 年 2 月 21 日号にかけて 15 回にわたり「表現主義と映画」（ルドルフ・クルツ著、岩崎昶訳）を断続的に連載した。クルツは、表現主義映画の限界を見定めながらも、その頂点を極めた『カリガリ博士』が現出した風景について、次のように記述している。

> 街路が彎曲し、重なり合ひ、小さな都会の沈滞と偏狭と荒涼とが神経に迫つて来る。樹木は幻想的に上昇する藪で、禿げて、幽霊に似て、画面を凍らせながら分割する。小さな突き出し窓が何かの異体の様に空間を充し、斜角的な階段が人に踏まれて呻り声を発し、力が扉に生命を与へ、扉はさもないときは空虚な貪欲な穴である。すべての調度とすべての手段との原始世界的特質が喚び覚され、── 超時間的に、数学的な形式で表はされてゐる。（「表現主義と映画」（四）、『キネマ旬報』1927 年 3 月 21 日号）

見巧者のクルツの著作は、後年「表現主義映画」の標題で外村完二によって訳出された（『ドイツ表現主義』3、河出書房新社、1984 年）ほか、現在でもペーパーバックで読み継がれている。



ルドルフ・クルツ著『表現主義と映画』（Expressionismus und Film）ドイツ語版書影